

第 273 回新潟外科集談会

日 時 平成 24 年 5 月 12 日 (土)
午後 1 時 30 分～午後 3 時 27 分
会 場 新潟大学医学部 有壬記念館

一 般 演 題

1 自然消失した乳がんの 1 例

岡村 直孝

長岡西病院 外科

癌の自然消失は知られているが、稀と思われている。私はこの度、乳がんの自然消失例を経験したので報告する。症例は診断時 80 才女性。以前より抑うつ状態、認知症などあり、施設に入所中。乳房腫瘍に気づき、当科を受診。針生検にて乳癌と診断された。根治手術を希望せず、経過観察となった。間もなく食欲不振となり、活動性も低下したため、当院に入院した。症状改善の後、精神疾患などの治療のため他院に転院し、更に施設に戻った。8 年後、転倒を機に歩けなくなり、食事も低下したため当科に入院した。この時、腫瘍が消失していることが判明。CT を行ったが、原病巣も転移巣も認めなかった。以上より、自然消失と判断した。入院中に胃瘻を造設し、施設に戻った。Challis らは 1900 年から 1987 年までの間の 741 例の癌の自然消失例を集計し、うち、乳癌は 41 を占めた。乳癌の 1～2 割が自然消失するという推測もあり、意外と稀でない可能性もある。

2 気胸を伴う乳癌術後の局所再発例に胸壁切除再建を行なった 1 例

沢津橋孝拓・中塚 英樹・森岡 伸浩
清水 孝王・宮下 薫

燕労災病院 外科

症例は 41 歳、女性。右乳癌 (T3N3cM0 Stage

III c) に対して 2004 年 3 月 29 日に Bt + Ax を行なった。病理は invasive ductal carcinoma, scirrhous carcinoma, ly1, v1, ER (+), PR (+), Her 2 (+) であった。その後、術後補助化学療法を施行されていたが、2008 年 1 月に多発骨転移にて再発し、続いて右前胸部にも局所再発を呈した。2011 年 12 月 2 日未明に呼吸苦を自覚。胸壁局所再発の胸膜浸潤による開放性気胸の診断で入院となった。直ちに胸腔ドレーンを挿入後 12 月 22 日に胸壁切除再建 (有茎広背筋皮弁) を施行した。その後の術後経過も良好で術創部の感染なども呈することなく 1 月 6 日に当科退院し、現在も外来化学療法を継続している。

今回我々は気胸を伴った乳癌術後の局所再発に対して胸壁切除再建を施行した。本症例のように致命的な状態でも、肺肝脳転移を認めない場合は、病態改善のために上記のような手術が適応となりうると考えられた。

3 二次性副甲状腺機能亢進症手術症例の検討

小川 洋・角田 和彦・佐藤 攻

信楽園病院 外科

内科的治療抵抗性の二次性副甲状腺機能亢進症 (SHPT) に対して行われる副甲状腺摘出術 (PTX) は透析患者の QOL ばかりでなく生命予後の改善に寄与する。2002 年 1 月から 2011 年 12 月までに SHPT に対して外科治療を行った 131 例の手術成績および再発例・i-PTH 制御困難例の問題点等について検討した。初回手術では副甲状腺全摘と大胸筋内自家移植を原則とした。PTX 内訳は初回手術症例 117 例、再発に対して救済手術を行った 14 例であった。男女比は 63 : 68 で年齢は 56 ± 10 歳。初回手術例の術前透析期間は 16.0 ± 7.5 年であり、術前 i-PTH 値は 1182.5 ± 583.7、術直後 i-PTH 値 96.3 ± 234.8。初回手術症例における術直後 iPTH ≤ 60pg/ml 群は 70 % であった。再発 14 例のうち 10 例は初回手術時に描出出来なかった異所性副甲状腺が原因と考えられ、縦隔内病変 4 例に対して胸骨縦切開にて摘

出可能であった。大胸筋内移植片増殖例は4例あり、救済手術時は比較的容易に摘除可能であった。

4 術前のヘリカルCT検査が有用であった、結腸間膜原発 Schwannoma の1切除例

城之前 翼・大滝 雅博*・二瓶 幸栄**

鶴岡市立荘内病院 臨床研修医
同 小児外科*
同 外科**

今回、結腸間膜原発 Schwannoma の1切除症例を経験したので報告する。

症例は11歳、男児。左上腹部痛で発症。腹部CTでは径10cm・腫瘍内を下腸間膜動脈が貫通し内部不均一な造影所見を、腹部MRIではT1W1低信号・T2W1高低信号混在・DWI高信号を示した。悪性腫瘍を否定できず手術を行った。腫瘍を下腸間膜動脈が貫通しており、左結腸動脈分岐以後のレベルで血管処理後腫瘍摘出終了。病理診断では結腸原発 Schwannoma であった。尚、腫瘍の成分が純粋な Schwann 細胞のみからなる Schwannoma は良性腫瘍に分類されるが、文献検索上報告例は数例であった。術後経過は良好で現在のところ再発所見は認められない。

【結語】結腸間膜原発良性 Schwannoma の1切除例を経験した。手術術式の決定には術前のヘリカルCTによる3D構築が有用であった。

5 13歳で、右下腹部痛を契機に発見された腸回転異常症の1例

飯田 久貴・飯沼 泰史・平山 裕
吉田 索・升井 大介・新田 幸壽

新潟市民病院 小児外科

症例は生来健康な13歳の男児。突然の右下腹部痛で発症し、腹部CTで虫垂炎は否定されたが、上腸間膜動静脈および小腸、結腸の位置異常から本疾患と診断された。上部消化管造影で Treitz 鞅

の形成を認めず、腹痛は保存的に軽快したため、軸捻転を伴わない慢性の病態と考え、待機的に鏡視下 Ladd 鞅帯切離の方針とした。しかし術中所見で Ladd 鞅帯を認めず、腹腔鏡による腸管全体像の把握は困難と判断し、開腹術へ移行した。その結果、終末回腸と上行結腸が癒着しており、これに絡み付くように大綱が癒着していた。これらの癒着を剥離すると、結腸が回腸の背側に潜り込むように位置しており、病型として無回転型の垂型、または不完全な逆回転型が考えられた。本疾患の年長児例では非特異的な腹痛、嘔吐を主訴とすることが多く、その病型には本症例のような移行型、および混合型が存在することを念頭に置くべきである。

6 根治術時に肝外側区域切除を同時に施行した先天性胆道拡張症IV-A型の1例

荒井 勇樹・窪田 正幸・奥山 直樹
小林久美子・佐藤佳奈子・仲谷 健吾
大山 俊之・白井 良夫*・畠山 勝義*

新潟大学大学院 小児外科学分野
同 消化器・一般外科学分野*

先天性胆道拡張症(CBD)IV-A型の拡張胆管に対する治療は、その病態により異なる。

本症例は12歳、男児。11歳時に近医での超音波検査で肝に嚢胞状腫瘍を認め、当科に紹介となった。精査では総胆管の嚢胞状拡張と右肝管まで連続する拡張あり、さらにB3を占拠するような巨大な嚢胞状拡張を認めた。拡張胆管切除と肝管空腸吻合による根治術の他に、嚢腫状B3胆管を含む肝外側区域切除を同時に施行した。術後特に合併症無く経過し、術後16日目に退院となった。術後6か月経過した現在、術前から認められた右肝管の軽度拡張はあるが、肝機能障害は無く、術後良好な経過である。CBDIV-A型への外科的治療に関する文献的考察を加えて報告する。